

日本語教員と文化リテラシー

佐々木 倫子

1. 日本語教員養成の教育内容

日本語教育は社会の動きと密接な関係を持ちながら歩んできた。21世紀初頭の現在、日本社会の国際化という大きな変動とともに、日本語教育もまた変革期にある。その動きは日本語教員に求められる資質・能力にも反映されており、2000年3月にまとめられた「日本語教育のための教員養成について」にあるシラバスは、それ以前のシラバスとは異なり、言語とその教育のみを重視するわけではない。無論、「日本語教育」である以上、「言語」が中核にならないわけではない。が、「言語」というより、より広く「コミュニケーション」を核として、それが「社会・文化・地域に関わる領域」「教育に関わる領域」「言語に関わる領域」の3領域からなるとしているのである。そして、領域の区分として表の左側にある5区分が考えられている。「社会・文化・地域」「言語と社会」「言語と心理」「言語と教育」そして「言語」である。さらにそれぞれの区分が、3ないし4の下位区分を持つが、そこではいっそう「社会」「異文化」といった色彩が前面に出てくる。さらに、内容例としてあげられた語は145語あり、その中で「文化」あるいは「社会・文化」と密接に結びつく語が3分の1以上を占める。これら「内容」として挙げられた語は、あくまでも例であり、分野を網羅するキーワードがすべて挙げられているというわけではない。しかし、明らかな“文化志向”が見られることは確かであり、教員養成の大きな転換点を示すものと言えよう。

表 日本語教員養成において必要とされる教育内容

区分	内容例 (順不同)	
社会・文化・地域	世界と日本 異文化接触 日本語教育の歴史と現状	文化/文明/社会/日本事情… 国際協力/文化交流… 言語政策/世界各地の日本語教育事情…
言語と社会	言語と社会の関係 言語使用と社会 異文化コミュニケーションと社会	ことばと文化/社会言語学/社会文化能力… 待遇・ポライトネス/地域生活関連情報… 異文化受容・適応/言語・文化相対主義/ 自文化(自民族)中心主義/アイデンティティ/ 多文化主義/異文化間トランス/言語イデオロギー…
言語と心理	言語理解の過程 言語習得・発達 異文化理解と心理	談話理解/予測・推測能力/視点… 習得過程/中間言語… 異文化間心理学/社会的スキル/集団主義…
言語と教育	言語教育法・実習 異文化間教育・ コミュニケーション教育 言語教育と情報	実践的能力/学習者情報/教育環境/地域別・ 年齢別日本語教育法/教育情報… 異文化間教育/多文化教育/国際・ 比較教育/国際理解教育/コミュニケーション教育/ 異文化コミュニケーション訓練/開発コミュニケーション/ 異文化マネジメント/異文化心理… 教材開発/メディア・リテラシー/ 情報リテラシー…
言語	言語の構造一般 日本語の構造 言語研究 コミュニケーション能力	一般言語学/世界の諸言語… 日本語の系統/意味体系/語用論的規範… 社会言語学/認知言語学/言語地理学/ コミュニケーション学… 言語運用能力/社会文化能力/対人関係能力/ 異文化調整能力…

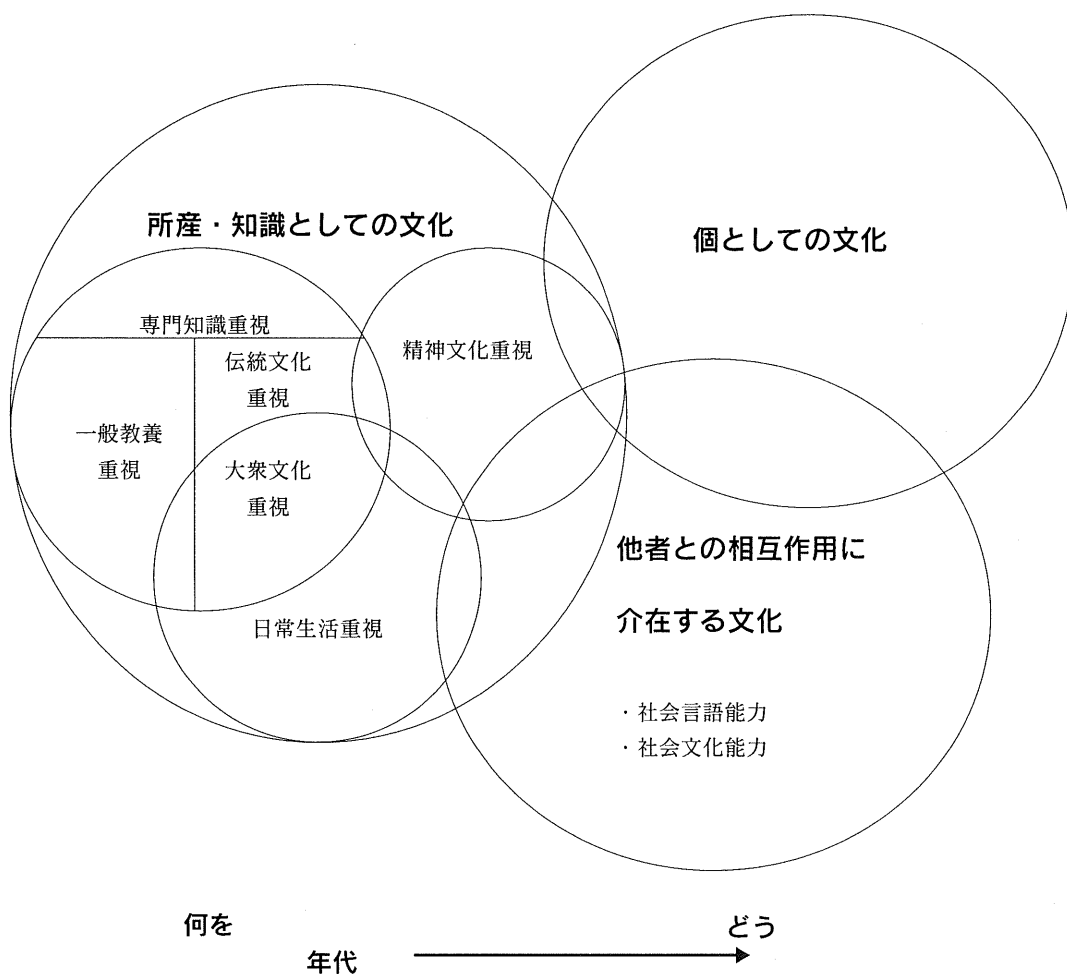
そこで問題となるのが、ここに繰り返し現れる「文化」とは何を意味するかということである。「異文化接触」「文化交流」「異文化コミュニケーション」「社会文化能力」といった語の「文化」概念は共通理解を得ているものだろうか。

2. 日本語教育において重視される文化概念の流れ

日本語教育ではこれまでどのような文化概念が重視されてきたのだろうか。「文化」はさまざまな文脈で言及され、多様な意味づけをされている。本発表者はこれまで、日本語教育において、どのような文化概念が重視されているかを追ってきた（詳しくは、佐々木2000,2001,2002aなど）。そして、実践のなかにおける「文化」を、以下のような文化概念図にまとめた。（図参照）これは、1980年代、1990年代に日本国内で発表された、日本事情、および、文化重視、内容重視の日本語教育などの（1）実践報告、（2）教材、（3）論考、そして、（4）国内高等教育と海外高等教育機関へのアンケート調査（長谷川・佐々木・砂川・細川（1994）（1998））への回答、の4種類の資料に出来る限り目を通して図示を試みたものである。時代の流れと共に「文化」概念の重視点が移動しているが、それは図の下方の矢印で示した。つまり、所産・知識としての文化重視から、相互作用に介在する文化重視、および、個人としての文化重視への移動を指す。それは同時に、何を教えるかから、学習者の文化体得をどう支援するか、への重視点の移動でもある。

そこで、この流れが21世紀初頭においてどれだけ明確になったか、また、国内中心ではなく、国外での動きはどうかの2点を見るために、次に紹介する現状分析を行った。（詳しくは佐々木（2002b）参照）これは韓国で行われた、ある大きな学会での発表から日本語・日本文化教育関係者の文化概念を探ったものである。

図 日本語教育で重視される「文化」概念



3. 学会発表に見られる「文化」

3.1. データについて

取り上げた学会は、「日本語教育国際シンポジウム 21世紀型総合的日本語教育における語学・文学・文化および

メディアのあり方」と題して、2000年11月にソウルにおいて行われたものである。この学会は、韓国日本学会および日本語教育学会の共同主催によるもので、韓国外国語教育学会および中華民国日本語文学会の協賛を得、韓国学術振興財団、日本国際交流基金をはじめ、多くの後援を得ていること、予稿集が500余ページという大部にわたること、日本語教育が主テーマで、なおかつ、テーマに「文化」が明示されていること、後に水谷/李（編）の報告書が出版されたことなど、「文化」概念の、特に東アジアにおける現状を探るのにふさわしい学会と判断した。ちなみに本パネルのパネリストである李徳奉先生は主催者であった。

現状分析の方法であるが、まず大部の予稿集から、「文化」の言及箇所を収集した。収集するにあたっては、固有名詞中の「文化」の削除、タイトル、注、参照文献、および、資料の中の「文化」の削除、小見出しは本文同様に扱いデータに含めるなどの原則を立てた。また、既に1語として成熟しているとみなされる「文化的、文化人類学」は削除するが、「各文化」、「他文化」「多文化化」「母文化」「文化論」などの「文化」は収集した。「異文化」は一語として成熟しているとも見られるが収集した。「異文化理解」「異文化コミュニケーション」などの文脈で数多く出現した。予稿集には文字化けが散見されたが、「文化」の言及部分に影響は見られなかった。

3.2. 発表者数、および、「文化」への言及者数

以下は、発表者を、名前、および、発表時の所属から分類したものである。発表者を「文化」の基準で分類する時、男性文化/女性文化、大学人文化/非大学人文化なども考えられる。しかし、本分析では、在住場所と氏名から推定される出自を用いた。最初の数字が発表者数で、括弧内の数字がそのうちで文化に言及した発表者の数である。

(1) 日本在住日本人（氏名から日本語・日本文化を母語・母文化とすると考えられ、所属や発表内容から日本在住と考えられる人）	65人	(21人)
(2) 韓国在住韓国人（韓国語・韓国文化を母語・母文化とすると考えられ、所属や発表内容から韓国在住と考えられる人）	21人	(9人)
(3) 韓国在住日本人	18人	(11人)
(4) 日本在住韓国人	5人	(1人)
(5) その他	11人	(8人)
	計120人	(50人)

120人の発表者中、50人という数字は、かなり多くの人が言及したことを示している。

3.3. 重視概念による分類

次に行ったのは、言及された「文化」を、重視する概念にそって分類することだった。これは予稿を読むことだけで判断しており、発表者の意図とは多少ずれることもあると思われる。ただ、分析者が分類に迷うケースはさほどなかった。3分類の例は以下の通りである。

「所産・知識」面を重視するものには、「学校には文法を習いに来るのであって、文化を習いに来るのではない。」（(1)－13,14）、「日本の歴史と文化に対する知識の習得を通じて、教養と知性を持ち合わせた人間を育む」（(2)－1）などがある。

「相互作用」を重視する文化概念の圧倒的多数が「異文化間コミュニケーション」「異文化理解」「異文化接触」といった文脈で出現した。

「個」としての文化重視に分類されたのは、「一人一人の問題として文化を捉えさせているもの」（(1)－8）、といった言及である。

分類の結果は、以下の通りとなった。

	所産・知識重視	相互作用重視	個重視
日本在住日本人 21人	85	110	35
韓国在住韓国人 9人	127	5	1
韓国在住日本人 11人	72	122	0

日本在住韓国人	1人	1	1	2
その他	8人	74	45	6

①「所産・知識」重視例

所産・知識としての文化概念が重視される、「他者の文化や歴史を文献を通して考察し」(5-4)といった文化観の言及は、どのグループにも見られる。しかし、圧倒的に言及が多いのは、韓国在住韓国人グループである。「昔話がかがなぜ日本人に好まれているかをいっしょに考えることによって日本文化の根底をなしている日本人の情緒や考え方を理解できる(後略)」(2-3)といった言及は一人にとどまらない。このグループの日本語教育関係者は、多くの場合、母語・母文化を同一にする相手と向き合っている。自身が文化的背景を異にする学習者とのコミュニケーションに向き合っているわけではない。向き合っているのは、ボーダーレスの時代と言われ、日本の大衆文化を無批判とも思えるような様子で受け入れる若い世代が多い。彼らに対する日本語教育の場で、言語と文化の接点は、教師が幅広い、あるいは、質の高い文化の情報を提供し、(1)日本語学習の動機付けに役立てる、(2)学習者とのやりとりの中で、より深い文化理解を促す、ことにあるのではないだろうか。ここには、確固とした、「日本語と日本文化」というものが存在し、その高度な運用能力と深い理解は、確固たる深い文化知識なしには育ち得ないという教育観の存在を感じる。

②「相互作用」重視例

相互作用重視の言及が、所産・知識重視への言及を超えたのは、(1)日本在住日本人と(3)韓国在住日本人グループである。日本在住日本人は、多くが外国人日本語学習者と日夜接する人々であり、他者との相互作用に介在する文化を、接触場面においてしばしば認識させられる人々である。韓国在住日本人は自身が文化的ゲストの立場で、同様の認識をすることが多いと思われる。

③個としての文化

言及した発表者はかなり限られているが、(3)を除く、どのグループにも見られた。「母語や母文化を積極的に取り入れた試み」(1-10,11)、(4)「体験を積み重ねることにより、母文化環境での成長と共に日本語による社会文化能力も拡大されていくのであろう。」(5-2)といった言及からは、「日本文化」対「韓国文化」といった、対立的構図もステレオタイプの異文化理解も排除し、「文化」を個人が構築していくものと捉える姿勢が見える。

4. 文化リテラシーを持った教師、育てられる教師

以上の分布は、いかに人が自身の体験を通して概念形成をしていくかを改めて浮き彫りにしたと感じさせる。国外では伝統的文化観が根強いことも示している。現代は例え同国人であっても、教師と学習者の文化接触体験が大きく異なる時代である。教師が経た日本語・日本文化との接触の形がそのまま学習者にあてはまるとは言えない。遠い遥かかなたの地域で使われている外国語を書物によって学ぶ時代から、「聞く・話す・読む・書く」の4技能の育成のために言語操作能力を重視する時代を経て、現在はいわゆる共生のための日本語教育へと教育の枠が広がってきている。異なる言語・文化的背景を持つ者同士が直接的接触の中でそれぞれ自己実現にかなった学習を進め、すべての人に等しく自己実現の機会を与える社会を構築していくことを目指すことを支援する言語教育の時代へと動いてきている。教師からの知識伝達ではない、学習者の文化リテラシー能力の獲得の支援ができる教師が必要とされている。ここでの「文化」は、かつての動機付けを目的とする、エキゾチックな伝統文化的要素を重視する扱いに留まることなく、「社会文化」とも呼ぶべき広い範疇を考えるべきであろう。しかし、その認識が十分とは言えないし、現状の教育場面での応用はきわめて不十分である。

さらに、接触場面の増大は「日本語・日本文化 対 韓国語・韓国文化」の範囲だけに起こっている現象ではない。学習者の母語・母文化と日本語・日本文化という、ふたつの言語・文化という二項対立的な見方にはおさまらない。

どのような文化的背景を持つ相手とでも、地球の一員として同等の立場に立ち、教員自身の文化への自覚を持った上で、相手の文化を読み解き行動できる、そして、相手である学習者もどのような文化的背景の人との調整能力を持つ、そのような文化リテラシーの育成が支援できる能力である。

具体的な教員養成においては、まず教師志望者が自身のエスニック文化に気づき、それを少し広げるところから始めるようにしたい。白水（1998）は、多文化主義を「おのおののエスニック文化主義を受入れて共存していこうというマジョリティの側の観念」と規定する（1998:81）が、マジョリティの側、「正統言語・正統文化」の伝道者の立場に立ちがちの、日本人日本語教員にとって、多文化リテラシーへの気づきはきわめて重要である。「日本文化」と言われるものも複文化であるということ、文化の接触と越境は国境線を越えるか越えないかによるわけではないこと、ひとつの国家の中でも、地域の中でも、民族間、社会階層間、性差や年齢差が引き起こす文化摩擦が見られること、ムラ社会の終焉と共に、固定的な文化の枠組みの上になりたつ理論も実践も考えられない時代になっていることなどを踏まえ、日本語教員と文化リテラシーについて考え続けていきたい。

参考文献

- 佐々木倫子（2000.7）「日本語教育と文化」国際交流基金韓国巡回セミナー資料
- 佐々木倫子（2001）「日本語教育と『文化』概念」『2001年度 日本語教育学会秋季大会 予稿集』日本語教育学会 pp.38-41
- 佐々木倫子（2002a）「日本語教育で重視される文化概念」『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社 pp.218-234
- 佐々木倫子（2002b）「日本語教育と文化教育との接点を求めて」『日韓の言語教育及びキリスト教教育が抱える諸問題』日韓シンポジウム2002企画運営委員会 pp.43-51
- 白水繁彦（1998）『エスニック文化の社会学』日本評論社
- 日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議（2000.3）『日本語教育のための教員養成について』
- 長谷川恒雄・佐々木倫子・砂川裕一・細川英雄（1994）『外国人留学生のための「日本事情」教育のあり方についての基礎的調査・研究』1992・1993年度科学研究費補助金研究成果報告書（総合研究（A） 課題番号04301098）（研究代表者 長谷川恒雄）
- 長谷川恒雄・佐々木倫子・砂川裕一・細川英雄（1998）『諸外国における「日本事情」教育についての基礎的調査研究』1995年度～1997年度科学研究費補助金研究成果報告書（国際学術研究 課題番号07041023）（研究代表者 長谷川恒雄）

<資料>

- 韓国日本学会 第61回 国際学術大会（2000.11）『日本語教育国際シンポジウム Proceedings』韓国日本学界・日本語教育学会
- 水谷修/李徳奉（編）（2002）『総合的日本語教育を求めて』国書刊行会